

【大会校企画シンポジウム】

ソーシャルワークにおける交差性分析の意義

ーワーカーの批判的省察の観点からー

大阪公立大学 児島 亜紀子

キーワード：ソーシャルワーク 交差性 批判的省察

問題の所在

ジェンダー平等を実現させるために、インターセクショナリティ(=交差性)の観点から差別を検討することの重要性が指摘されるようになって久しい。1980年代に黒人フェミニストによって提出された当該概念は、多様な差別や抑圧がジェンダーや人種、階級といった諸カテゴリーが交差するなかで形成されることを描き出し、ジェンダーのみに焦点を当てるアプローチでは、もはやジェンダー平等は達成できないという理解をもたらした(高橋 2022)。現在では、ジェンダーを他の抑圧のシステムから切り離された分析的カテゴリーとして、あるいはそのコンテキストを考慮せぬまま考えることは不可能であるといわれている(Samuels& Ross-Sheriff 2008)。ソーシャルワークにおいても、近年、複雑なアイデンティティと社会構造がわれわれの生活状況に与える影響を理解するための分析枠組として交差性を用いることが定着しつつある。本報告では、ソーシャルワーク領域において交差性という枠組を用いることの理論的かつ実践的意義を改めて考察し、ことにこの方法がソーシャルワーカーの行う批判的省察とどのように関わるのかに焦点づけて検討することとしたい。

ソーシャルワークと交差性

交差性とは、人種、ジェンダー、性的指向、社会経済的地位、障害など複数の社会的アイデンティティが、個人の経験というミクロなレベルでどのように交差し、マクロな社会構造レベルにおける抑圧のシステム(人種差別、性差別、階級差別など)を反映しているのかを検証する理論的枠組であり、方法論でもある(Choo & Ferree 2010; Minnick & O'Brien 2018)。しかしながらレンズとしての交差性は曖昧さをも内包する。2000年代からフェミニストたちは、交差性が特権的で権力を有する立場をも含むアイデンティティの統合理論であるのか、それとも幾重にも周縁化されたアイデンティティを理解するためのパラダイムなのかについて議論してきた。また、交差性概念の使用は固定化されたアイデンティティカテゴリーの存在をあらかじめ示すものでもあり、それ故に当該概念の認識論的前提に疑問を投げかける論者も存する(Mehrotra 2010)。これに対し Mehrotra(2010)は、ソーシャルワーク(ことにフェミニストアプローチ)というものは、社会正義と女性のエンパワーメントにコミットする「折衷的で発展的な学問体系」であるため、こうした交差性の曖昧さや認識論的前提が内包するジレンマと関わるのにふさわしい立場だという見解を示している(Mehrotra 2010)。

レンズとしての交差性使用の理論的・実践的意義

交差性の活用がソーシャルワークにとって重要な意味を持つのは、ソーシャルワークの価値と理念の根幹にある「社会正義の実現とすべての人を全人的な存在として認識すること」とい

う考え方と、交差性が目指す境地とが重なり合っているからとされる（市川 2022）。

交差性を活用した具体的な分析の方法としては、Mehrotra(2010)や Mattsson(2014)が、McCall(2005)の提示した3つの交差性アプローチ、すなわちカテゴリー間アプローチ、カテゴリー内アプローチ、カテゴリー外(あるいは反カテゴリー)アプローチをソーシャルワークに適用することを提唱している。このうちカテゴリー間アプローチは社会集団間の不平等を実証的に示すために有効であり、事実これまで多くのソーシャルワーク研究において採用されてきたが、抑圧の複雑さに十分に配慮できない憾みがある。カテゴリー内アプローチは、社会集団内の多様性に焦点を当てるもので、この方法により、数多くの抑圧の交差点に位置する女性たちの生きた経験や複数のアイデンティティを映し出すことができる。最もラディカルな反カテゴリー的アプローチは、ポスト構造主義的なフェミニズム理論をその母体としており、人種や階級、ジェンダーといった社会的カテゴリーを分析の単位とする考え方自体に疑問を投げかける（Mehrotra 2010）。反カテゴリー的アプローチを採用するということは、硬直した社会構造を生み出すレッテル貼りの状況に異議を唱え、カテゴリー内のニュアンスや異質性に着眼することを意味している（Minnick & O'Brien 2018）。

ソーシャルワーカーの批判的省察と交差性

上述したように、交差性は個人の経験と社会構造との関係を浮かび上がらせるための枠組であるが、ワーカーにとって社会構造を問題化することは、しばしばクライアントの生活経験の実態とは乖離して見えてしまいがちである。そこでソーシャルワーカーの批判的省察が有効な手立てとなる。批判的省察とは、出来事や状況に焦点づけ、それに関わる感情や思考、行動などを、新しい理解の仕方で分析することを意味する(Mattsson 2014)。このことによって、ソーシャルワーカーは、自分やクライアント、そしてソーシャルワーク実践への社会構造の影響をより明確に認識することができるようになる。Mattsson(2014)は、批判的省察をするにあたり、前述した3つのアプローチのうち、反カテゴリー的アプローチとカテゴリー間アプローチとを組み合わせることを提唱し、脱構築的な問いを投げかけることが重要だとした。すなわち、ソーシャルワーカー自身と「クライアント」についての理解に何が組み込まれ、何が排除されているのか、何が可視化され、何が不可視化されたままなのかといった問いである。このような問いをポスト構造主義フェミニズムやポストコロニアル的理解とともに提起し、その答えを考察することが求められる。このことによって、批判的省察はジェンダー、セクシュアリティ、階級、人種といった編成がどのように抑圧や不正義を強化しているのかについて回答を与える。その結果ソーシャルワーカーとクライアント関係、そして社会問題に関するより複雑な理解が可能となるのである。

【引用文献】

Choo, H. Y., & Ferree, M. M. (2010). "Practicing intersectionality in sociological research: a critical analysis of inclusions, interactions, and institutions in the study of inequalities". *Sociological Theory*, 28(2), 129–149.

Mattsson, T. (2014) "Intersectionality as a useful tool: anti-oppressive social work and critical reflection", *Affilia: Journal of Women and Social Work*, 29(1), 8-17.

McCall, L. (2005) "The complexity of intersectionality", *Signs*, 30, 1771-2002.

Mehrotra, G. (2010) "Toward a continuum of intersectionality theorizing for feminist social work scholarship", *Affilia: Journal of Women and Social Work*, 25(4), 417-430.

Minnick, D.J. & O'Brien, P. (2018) "Domestic violence, human rights, and postcolonial intersectionality of afro-descendent and indigenous women in Cuba and Guatemala", *Journal of Human Rights and Social Work*, 3(4), 216-228.

市川ヴィヴェカ(2022)「なぜ今インターセクショナリティなのか?アイデンティティの交差性が照らし出す社会福祉実践の光と影」『福祉労働』172、10-21。

Samuels, G. M., & Ross-Sheriff, F. (2008) "Identity, oppression, and power: feminisms and intersectionality theory", *Affilia: Journal of Women and Social Work*, 23, 5-11.

高橋麻美(2022)「公共政策における「交差性」概念の有効性と課題 —理論的枠組みと批判的实践という観点から」『ジェンダー研究』25、119-136。